

海外臨床研修レポート
「海外臨床研修を通じて見えてきた
日本の医療の魅力」

名城大学 薬学部 薬学科 6年 Dクラス 100973405 池田衣里

私は2015年7月15日から27日の期間に行なわれた、アメリカ合衆国アラバマ州にあるサンフォード大学での海外臨床研修に参加しました。サンフォード大学は名城大学薬学部が学術交流協定を結んでいる大学の一つであり、米国の先進的な薬剤師の役割を理解するために約2週間の海外臨床研修プログラムが組まれています。

今回私がこの海外研修に参加しようと思った理由は、5年次の実務実習を通じ、自分自身の医療現場でのコミュニケーションスキルに課題を感じたからです。名城大学薬学部では早期からコミュニケーションの講義があり、医療現場で必要となるコミュニケーションスキルを習得します。大学の講義では主に「薬剤師と患者間でのコミュニケーション」を学びました。しかし、病棟薬剤師の常駐化が推進されている昨今の医療現場では、「薬剤師－看護師間」や「薬剤師－医師間」でのコミュニケーションスキルを身につけることの重要性を感じました。大学の講義で米国の薬学生は医療従事間のコミュニケーションの授業を受けていると聞き、ぜひ私も米国の薬学生が受けているコミュニケーションの講義を受けて、今後の薬剤師としての職能に活かしたいと思い、海外臨床研修への参加を決めました。

また、海外渡航が初めてだった私にとって、海外臨床研修参加における名城大学の手厚いサポートも魅力的でした。研修の1ヶ月前から、週に1回2時間の英会話レッスンが行なわれ、アメリカの入国審査のシミュレーションや薬学英语を習得しました。これらは海外渡航の際や研修内容の理解において非常に役立つものでした。またESTAの申請や、海外滞在における注意点、身の回りのことなど、事前に行なわれたオリエンテーションで詳細に教えて頂けるため疑問点も解消し、安心して渡航することが出来ました。

今回のサンフォード大学の研修へはエジプトの薬学生と韓国の薬学生と私たち名城生の合計40人以上が参加しました。そのうち日本人の学生は7名と少数であったため、非常に緊張しました。例年より参加人数が3～4倍と多かったためか、今回のカリキュラムは主に大学内での講義がメインでした。講義内容は、「コミュニケーション」「医療安全」「抗凝固薬」「生涯学習」「症例検討」「高血圧」「疼痛管理」「肺炎」「医薬品情報」「アメリカの薬学教育」など多岐に渡りました。多くのことを学習した中でも、私にとって印象深かったこと2点について記述したいと思います。

まず、私が1番興味を持っていた「コミュニケーション」の授業において、「薬剤師が医師、看護師と理想的な関係性を構築する上で、何が1番大切だと思うか。」という質問をしました。そうしたところサンフォード大学薬学部 臨床実務部門長であるMichael Hougue教授から貴重な意見を頂きました。Hougue教授は「アメリカの医療においても、医師や看護師は忙しい。なぜなら、医師は限られた時間で多くの患者を診察せねばならず、看護師も莫大な業務と時間に追われるからだ。薬剤師ができることは、彼らの仕事を少しでも楽にすること。なかでも特に効果的だと思うのは、まず彼らの仕事を観察し、薬剤師から見て煩雑でミスを犯しやすいポイントを発見して、薬剤師自らがそれらを改善するシステムの構築やルールを定めることだ。特に患者の看護を日常的に行う看護師の業務にはそういう煩雑でミスを犯しやすいポイントが多く、彼らは日常的に行っている業務だからこそ気づ

かないことが多い。そういうポイントを改善することは、業務を楽にするだけでなく、医療ミスを減らし安全な医療を提供できることに繋がる。」と仰っていました。日本のこれからの病院薬剤師に求められるスキルそのものだと私は感じました。他にも、医師に患者の状態を報告した上で自分の意見を提案したい場合には、アメリカでは S-BAR 形式という報告制度を利用しており、迅速かつわかりやすい効果的な情報を伝える方法を学びました。

次に「疼痛管理」の講義で「日本の医療ではアメリカに比べ、オピオイドの使用量が少ないが、この差に関してどう思うか。」と質問をしてみました。するとサンフォード大学の先生から、意外な意見を伺うことが出来ました。先生は「日本では、鎮痛目的でオピオイドを使用するときに、少量から始めて、徐々に使用量を増やしていくと聞いているわ。でもアメリカでは、オピオイドを使うときは、まず多めの量から使用して、副作用が出たら拮抗薬を使っているのよ。薬剤師の私の意見は、日本のようなやり方のほうが安全でいいと思うわ。」と仰っていました。統計から見えてくる、アメリカと日本の医療の違いを、実際にアメリカの薬剤師の方に直接伺うことが出来ることは非常に有意義な経験であると感じました。

今回の海外臨床研修を通じて、私は日本の医療の良いところも発見することが出来ました。それは、国民全員が平等な医療を受けることができるという安心です。日本は原則的に国民保険に加入していれば自己負担は3割負担で済みますし、任意保険で多額の医療費のかかるアメリカとは医療そのものの制度や考え方が全く異なっています。『アメリカの薬剤師は日本の薬剤師の10年先の姿である』などともいわれますが、決して日本の薬剤師の潜在的な能力がアメリカの薬剤師に劣っているわけではなく、日本の薬剤師はアメリカの薬剤師に比べ、職能や責任がまだまだ少ないのだと感じました。そのため、日本でも制度そのものが変われば、薬剤師の職能はもっと開拓できる可能性があり、それに伴った責任も出てくると考えています。日本の薬剤師の活躍の場を広げるためには、薬剤師の努力と責任の拡充が欠かせないと考えました。